

JICAフィジー草の根プロジェクトの開始にあたって

田中 秀幸(JECK会員)

JICAの「フィジー草の根プロジェクト」に応募してから、まず2-3回は空振りするのが通例と言われショックを受け、案の定、4回目にようやく受理された。この間3年を費やした。JICAの最高選考機関である有識者会議を高得点で通ったとの内定を得て喜んだのもつかの間、その後の関係省庁との法定会議とやらで、追加情報が求められた。2回の資料提供の後、しばらくして出された回答は、予算は申請額の半分以下の2,000万円以内に、そして3年間を2年に短縮しろということだった。そのため、提案書の再修正が求められ、2回の修正を行って、3月ようやく最終計画案が認められた。本案件の実施に先立ち、JICAフィジー事務所とフィジー政府とで覚え書きの調印式が4月に行われることになり、それに立ち会うためにフィジーに渡ったが、フィジーの暫定軍事政権が今年予定していた総選挙の延長声明を出したため、オーストラリアやニュージーランドらがフィジーに対する制裁として援助協力を見合わせることを表明した。これに合わせて日本政府も新規の援助案件の見合わせを実施した。調印式の丁度前日のことである。結局調印が行われたのは7月になってからであった。それから本事業の契約手続きがようやく始まった。これでいよいよ事業が始められると思ったが甘かった。一円単位の詳細な予算書の提出が求められ、これが実に大変な作業だった。最低2社からの相見積もりが必要な2万円以上の資機材や工事費に関しては4月にフィジーに行った時にある程度取り寄せていたものの、住民参加による工事などは相見積もりをとるのは全く不可能であり、そのための理由書を要請されたり、見積もり入手後、フィジドルの切り下げがあったためフィジーから再度見積もりを取り寄せてほしいと言われたり、打ち合わせや資機材調達のための県内の交通費の詳細内訳を求められたり、YCATからのリムジンは使えないのでJRの普通料金で請求してほしいとか、なんやかんやで正式契約のための必要書類が全て整ったのが8月20日であった。このあと事業の実施委託契約の締結や3ヶ月分の前渡金の支払い手続きなどがまだ残っており、事業の開始はおそらく9月になってしまうものと思われる。結局、初めをつまづきが最後まで災いした結果になってしまった。この程度の過程はむしろ当たり前と思うべきなのだろうか。市民参加による国際協力事業として位置づけられている草の根事業が、はたしてこのようなやり方で一般市民と連携していけるのだろうか疑問に思えたこともあった。



さて、本題であるが、本案件はYICの前身とも言える元神奈川国際水産研修センターと多くの係り合いを持っていた(株)国際水産技術開発とJECKAが共同で提案したものである。太平洋の島嶼国は日本にもっとも近い隣国でありながら、利便性の関係で遠い国となっている。かつては天国に一番近い島とも言われたところもあるが、南太平洋はもはや最後の楽園とも言われなくなって久しい。その背景には、人口の増加に経済発展が伴わないことに起因する貧困層の拡大や政情の不安定、それに社会秩序の混乱による治安の悪化がある。またこのような社会・経済状態は沿岸の水産資源の乱獲も招いている。現在、殆どの島嶼国では沿岸資源の激減が大きな問題になっている。フィジーは日本では海洋観光国

として見なされているが、観光で潤っている地域はほんのわずかである。地方の村々では雇用機会が増えず、もっぱらサトウキビ生産が主な所得源である。これまで食糧源であった沿岸の魚介類は商品化し、漁業規制は有名無実と化し資源が急速に減少している。本プロジェクトは、フィジーで未利用資源となっているミルクフィッシュの仔魚を環境にやさしい粗放的手法で養殖し、村の食糧源並びに新しい収入源とすることを目的とした小規模パイロット事業である。粗放の養殖の適地が多く存在するフィジーの食糧安保を意図した将来的には、地場産業と発展していくことを願っている。フィリピンやインドネシア、それに台湾等で庶民の魚として大量に流通されているミルクフィッシュは全て池で養殖されたものであり、その養殖手法は400年以上にも渡って伝統的・持続的に行われている。ミルクフィッシュは天然では10cm位になるとリーフの外に出て行ってしまいうため、テーブルサイズのミルクフィッシュは殆ど漁獲されないという特徴がある。時々獲れても殆ど地元で消費されてしまうので、町の市場では殆どお目にかかれない。小骨は多いがフィジー人が好む魚の一種である。雨期が始まる12月初めまでにはどうしても池の建設を完了したいため、現在、一刻も早いプロジェクトの開始を待ち望んでいる。

JECKAの会員には、既に本プロジェクトを通して考えられる県民との交流に夢を描いているものもある。JECK会員はじめ県民参加によるミルクフィッシュの合同獲り揚げ、ミルクフィッシュの加工品開発支援、シーフードレストランの経営支援、YICレストランでのメニュー化、奨学基金の設立支援、マイクロファイナンスの運営支援、環境と資源の保全のための市民参加による研究開発支援、等、村おこし支援への夢は広がる一方である。JECKAの初めての本格的国際プロジェクトに対し、JECK/JECKA会員皆様を初め多くの市民の方々のご支援とご協力を切にお願いする次第である。

